

農業技術センターニュース

目次		
	露地ショウガの養分吸収特性 ……1	 三色ピーマンの株間・主枝数が収量に及ぼす影響 ……5
	果色の濃いピーマン「高育交11号」の特性 ……2	 トルコギキョウの11～12月出し栽培では育苗時のセル容量が大きいほど切り花品種が高い ……6
	タバコカスミカメの産地間リレーの可能性 ……3	 ナス促成栽培における炭酸ガスの施用効果 ……7
	ナシ新品種‘凜夏(りんか)’、‘甘太(かんた)’の品種特性 ……4	 土壌くん蒸剤のリスク低減と管理技術の開発に向けて ……8

露地ショウガの養分吸収特性

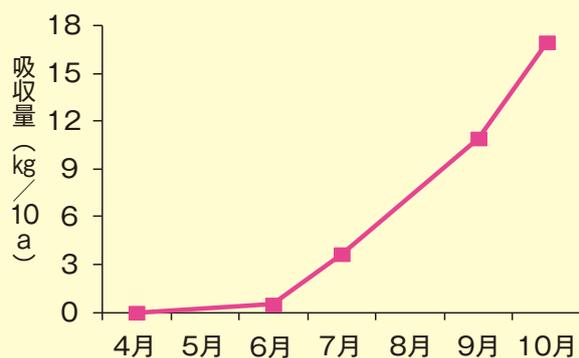


図1 時期別窒素吸収量の推移

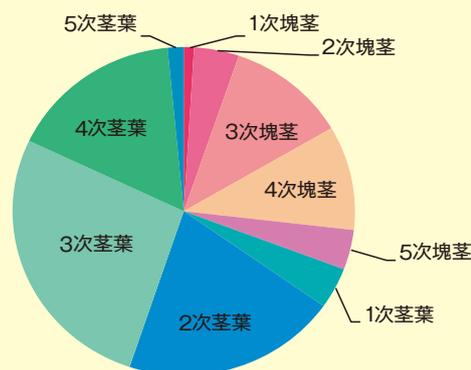


図2 収穫時の部位別窒素吸収割合

注) [耕種概要] 定植：2013年4月10日、土寄せ；6月8日、かん水開始；6月13日、基肥(/10a)；N28kg、P₂O₅23.6kg、K₂O8.4kg
 ・調査は高知県内の現地ほ場で、2013年4月10日、6月13日、7月24日、9月10日、10月22日(収穫時)に実施した。
 ・新塊茎重(収量試算)は5.9t/10aであった。
 ・茎葉とは偽茎と葉身を指す。

ショウガは全国シェア1位で、栽培面積455ha、販売金額31億円(24園芸年度)に達する本県の基幹品目の一つです。近年では栽培方法の改良による収量向上が著しく、施肥基準の見直しが求められるようになりました。そこで現地ほ場で、露地ショウガの時期別窒素吸収特性を調査しました。

その結果、窒素吸収量は、6月(定植して2ヶ月)までほとんど増加しませんでした。それ以降は急激に増加し、収穫時には10a当たり17.0kgとなりました(図1)。

また、収穫時の部位別窒素吸収割合をみると、新塊茎には3割程度、茎葉には7割程度存在することがわかりました。さらに、次塊茎毎にみると新塊茎では3、4次塊茎、茎葉では2、3、4次茎で高い存在割合を示しました(図2)。

今後は、多量3要素の施肥量や施肥体系の違いが生育や養分吸収量に及ぼす影響について検討する予定です。

(土壌肥料担当 十川由起 088-863-4915)